

## 山と俳句と煩惱と

稲沢進一

今から思えば二十年ほど前のことです。病後の健康回復のためにと山歩きを始めました。山頂に立てば心が軽くなり体力が強化されると思ったのです。山には自然の木々のざわめき、鳥の声、風の音等々、今までに経験したことのない新鮮な感動を得ました。それは、もう一人の孤独な自己に出会う貴重な時間でもありました。

咳をしても一人

尾崎放哉

一日が始まる元気霜柱

進一

当初の低山歩きがいつしか高じて、幾度かの冬季単独登山にエスカレートしました。最悪の事態を想定して事前の準備はしますが、山は天候に左右されるものであり、心身のバランスを崩して途中で下山することもありました。煩惱のままに行動し、願っても叶わないことがままありました。

鉄鉢の中へも霰

種田山頭火

薄氷を踏んで青空無くしけり

進一

人は煩惱の世界に生き、誰一人として、常に順風満帆であるという人はいません。夏目漱石の『草枕』の冒頭の一文。「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい。住みにくさが高じると安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくい」と悟った時、詩が生れて画が出来る」。

俳句は五七五の短い詩です。その表現方法は様々で、客観的な表現方法では主観は排されます。逆に擬人的表現方法では、物が主観を内包します。ただ、表現方法がどうであれ、言葉としては他者に伝わっても、言わんとする真意については、読者に意味不明な場合もあります。読者の理解は読者の想像の域を出ないか

らです。

また、真の俳句は、単なる自己主張、報告、伝達で終わらず、何らかの含蓄があります。余白、暗示、沈黙の部分があります。芭蕉の「いひおほせて何かある」です。その余白の部分に笑いがあるのが滑稽俳句ですが、笑いは微かであっても人を救います。魂が浄化されます。

富士山に登ることなく老いにけり 進一

仮の世をこの世とみせて曼珠沙華 進一

桃の花死は一生に一度だけ 進一

人は生者必滅で、誰にもその例外はありません。そして、その生においては修行を積むか、徳を積まなければなりません。一所懸命に生きて誰からも好かれる人が善人です。他人を変えることはできませんが、自分を変えることはできます。神を認識しても信じてはいけません。言葉は心、魂、物の存在を確定して、光のように波となり重量があると思います。これらは今の私の悟りですが、漱石の言葉を借りれば、本当に人生を悟った時に本物の詩、本物の俳句が詠めるのかもしれない。

煩惱を背負いつつ、人生という旅の山道はまだまだ続きます。

人目には涼しさうにも見られつつ 星野立子

とりあへず笑へば笑ふ初笑 進一